

迦才教學における行論の一考察

山 田 行 雄

一 迦才教學における行論を考察するにその資料となる自著は、所謂『迦才淨土論』三卷である。迦才は往生の行業について、自から「修何行業而得_レ生乎」（淨全・六三八）と設問し、これに答えて『大經』・『平等覺經』の三輩の諸行、『觀經』の三福十六觀、『阿彌陀經』の一七日の念佛、『鼓音聲王經』の十日の念佛、『大集經』の觀佛、更には『十住毘婆沙論』中の禮讚、世親の『淨土論』中の五念門、『大乘起信論』の發願廻向等、廣く諸經論中に説く往生の行業を探求し列擧するのである。そして迦才はこれ等種々多様な諸經論中の行業を歸納的に統一し、上根の者の爲に通別二因、中下根の者の爲には要略五因を定め示るのである。

上根の者にすゝめる通別二因のうち、通因とは、菩提心と三福の淨業である。別因とは念佛・禮拜・讚歎・發願・觀察・廻向の六種であるが、特に第一の念佛をひらいて、心念と口念とに分つのである。かかる通別二因を修する事のできぬ中下根の凡夫の爲に、迦才は次に更に要約した五種の行業

を示すのである。その五種とは、懺悔・菩提心・念佛・觀察・廻向がそれである。此の中下根の者の修する五種は、先に擧げた上根の通別二因の中の通因の中から菩提心のみを摘取り、別因よりは念佛・觀察・廻向の三種を出し、それに中下根の凡夫なるが故に懺悔を加えたものと見る事が出来る。然し、その上根の通別二因と中下根の要略五因の内容を考察し更に要約すれば、それは結局、菩提心と念佛とに歸するものと思考されるのである。

二 菩提心については、迦才は通因の中まず最初に菩提心を擧げて「如_ニ無量壽經中三輩生人_ニ」（淨全六・六三九b）と、『大經』三輩生の文を以つてするのであるが、此の事は曇鸞の『論註』の文を指南としていふと思はれ、また要略五因の中の菩提心について迦才は「須_レ發菩提心」若不_レ發菩提心「直自避_レ苦逐_レ樂恐不_レ得_ニ往生_ニ也」（淨全六・六四一a）と云うのである。即ち迦才は、淨土に生ぜんと願する者は皆等しく菩提心を發さねばならず、その菩提心こそ淨土願生に對

する享樂的懈慢の心を損斥せんとするものであるとした。此の事は、既に曇鸞が『論註』において、「若人_レ不_レ發_二無上菩提心_一但聞_二彼國土受_レ樂無_レ間爲_レ樂故願_二生亦當_レ不_レ得_二往生_一也」（眞聖全・一・三三九）と云い、菩提心をもつて爲樂願生を遮したのと全く同じ意である。

次に迦才の念佛義であるが、今『迦才淨土論』の中、念佛に就いて述べる語を検討するに、或は觀、或は稱、または觀念とも稱名とも區別のつかぬものが混然としている。例えば、「念佛者復有_二三種_一一是心念二是口念」（淨全六・六四〇a）と云い、特に「稱佛名」と明らかに稱名念佛を出す時に一心相續 觀_二佛相好_一若口念佛（淨全六・六四五a）觀_二察阿彌陀佛相好_一及稱_二佛名號_一（淨全六・六六四b）等と、常に觀稱共に擧げているのである。

かくの如く、觀念と稱名とを共に一念佛思想とし、淨土往生の行業として同一視して行く迦才の思想背景は、曇鸞における行論に在ると思考されるのである。

曇鸞教學における往生行を考察する時、信心・聞名・稱名・十念等を擧げることが出来るが、要は『論註』三願證の引意、或は『略論』を結ぶに十念釋をもつてする意よりして、特に十念念佛を重視している事は明確である。その曇鸞の説示する十念とは、佛體に對しては觀となり名號に望めては稱ともなり得るものである。いま迦才においても、「其土之門

凡聖同踐彌陀寶界 十念可_レ登既許_二大小俱遊 庶類齊往_一」（淨全六・六二八b）と、また「極樂乃至十念成就 卽得_二往生_一」（淨全六・六六三二）等と示す如く、十念をもつて阿彌陀佛國への往生行とするのである。迦才が此の十念を自から釋していないのは殘念なことであるが、然し『迦才淨土論』の第四章「出道理」において『觀經』の臨終十念往生を問題にし、その次に「問曰 如_レ彌勒所問經說_二十念_一中云_二非_二凡夫念_一不_レ雜_二結使念_一今此土衆生體是凡夫結使未_レ斷 云何念佛而得_二往生_一」（淨全六・六六四b～五a）と云う問を設けるのである。此の問の中、『彌勒所問經』の十念とあるが、現存する所謂『彌勒所問本願經』（竺法護譯）には十念の釋は無く、迦才自身が『發覺淨心經』の慈等の十種心を十念とも呼んでいる（淨全六・六四九b）と云うよりして、今この問の中の十念も慈等の十念とも解釋出來ぬ事もないのである。然し、迦才が此の問を設けた直接的意圖は、慈等の十念中の心念念佛を問題にしたのではなく、問の中にも云うが如き末だ結使を斷ぜざる、即ち煩惱具足の凡夫の念佛であると思考されるのである。而して、迦才は此の問に答えて、念佛それ自體は決して煩惱を雜えざるものであるとして、「唯須_二一心相續 觀_二佛相好_一若口念佛 心緣_二五欲_一是雜_二結使念_一念佛是淨淨心」（淨全六・六四五a）と云うのである。此の迦才の問答は、所謂『彌勒所問經』の十念を出すのであるが、迦才の意とする

ところは凡夫の十念念佛であり『彌勒所問經』の結使を難えざる十念に寄せて「彌陀寶界十念可_レ登」の十念を釋成せんとしたものと理解されるのである。即ち迦才の云う十念とは、今の問答よりして

十念——一心相續——觀佛相好(觀)念佛(稱)——念佛

との如くなる。ここに迦才が云う「一心相續」とは、曇鸞が『略論』の十念釋下に「無他心間難心心相續」(眞聖全一・三七五)と云えるものを承けたものであると推考できるのであつて、迦才は阿彌陀佛を念する、即ち「淳淨心」の一心相續の上に、若は佛の相好を觀じ、若は口念佛、即ち稱名する事が十念であると云うのであつて、此れは將しく曇鸞の十念釋義を承けたものであると思考されるのである。

然らば迦才は、此の共に十念の内容とする觀念と稱名とのいづれを本とするのであろうか。此の問題に就いて、迦才は上根の者にすめる別因六種の中の念佛に二種を擧げるのであるが、その中口念を釋するに「口念者 若心無_レ力 須將_レ來扶 將_レ口引_レ心 令_レ不_レ散亂」如_二經說_一 若人念_二阿彌陀佛_一 得_二百萬遍已去_一 決定得_レ生_二極樂世界_一 (淨全六・六四〇a)と、稱名念佛は心念(觀念)を成ぜん爲の手段であるとして、觀念を重視するのである。然し、中下根の者に示す要略五因中の第三の念佛を釋しては「須_二專念_一阿彌陀佛名號」(中略)

行住坐臥 閑時即念 常念_二佛名_一 (淨全六・六四一a)と云うのである。即ち行住坐臥の全生活において常に稱名念佛せしめんとするのであつて、然もその平生の稱名念佛に三種の益まで出すのである。即ち稱名念佛の三種の益とは、

- 一、由_二常念_一故 諸惡覺觀畢竟不_レ生 亦得_レ消_二於業障_一
- 一、由_二常念_一故 善根增長 亦得_レ種_二於見佛因緣_一
- 一、由_二常念_一故 勸習梵行 臨_二命終時_一 正念現前 (淨全六・六四一a)

である。即ち迦才は、上根の者には觀念を重とし、中下根の凡夫の爲には口稱念佛を本とする和理解されるのである。

然らば何故、極惡の凡夫が稱名念佛の一行で往生出来るのか。此の問題に答えて迦才は『觀經』下々品の十念念佛の滅罪の功を示すに三義をもつてするのである。その三義とは、

- 一、此心能引_二無始已來_一 及_二一生已來_一 所作善業 共相資助 即得_二往生_一
- 一、諸佛名號 惣_二萬德成_一 但能一念念佛之中惣念_二萬德_一
- 一、無始惡業 從_二忘心_一生念佛功德 從_二真心_一生真心如_二日忘心如_一聞 真心暫起 忘心即除 如_二日始出衆闇悉除_一 (淨全六・六六八a~b)

であり、名號の功德力用を讃嘆するのである。これは曇鸞が『論註』において『觀經』下々品の十念の價值を釋するに、三在釋(眞聖全一・三二〇)をもつてするのとその軌を同じく

するものである。

三 かくの如く、迦才における行論は、曇鸞の十念往生の思想を背景にしつつ、特に極惡劣機の衆生の行業を、唯一稱名一行へと統攝結集せんとした事は、曇鸞の十念釋義を承けたとは云え、直接には迦才自身の時機の省察と阿彌陀佛の本願に注意した事に起因すると思考されるのである。即ち迦才は、興教の時機を明すに『大集月藏經』の五個の五百年説を引いて、「今卽約^レ時約^レ根 行者無^ニ定慧分^一者 唯須^フ專念^ニ阿彌陀佛^一 求^ル生^ニ淨土^一 此爲^ニ要路^一」（淨全六・六六四a）と示す如く、現今は未法なれば定慧の分無し、ただ稱名念佛のみが淨土往生の要路なりと云うのである。また阿彌陀佛の本願に注意しては、「法藏比丘四十八大願 初先爲^ニ一切凡夫^一」（淨全六・六四三a）と云い、阿彌陀佛の淨土建立の意を語つては、「淨土興意 本爲^ニ凡夫^一 非^レ爲^ニ菩薩^一也」（淨全六・六四三a）とまで云つて、善導をして「定爲^ニ凡夫^一不^レ爲^ニ聖人^一」（眞全一・四五三〜四五四）と云はしめた淵源を感じさせるが如きにまで迫るのである。而して又阿彌陀佛の四十八願をもつて他力となし、「極樂憑^ニ阿彌陀佛四十八願^一他力往生」（淨全六・六六三b）と讃嘆し、それを船に譬えては「阿彌陀佛舉^ニ慈悲棹^一 乘^ニ大願船^一 運^ニ度一切苦惱衆生^一」（淨全六・六六六b）と云うのであつて、あたかも純正淨土教の易行思想に

直結するかの如き感をいだかしめるのである。然し、他方においては「俱具^ニ三義^一 卽得^ニ往生^一 一一一切衆往生修行 以爲^ニ因緣^一 二彌陀本願 爲^ニ増上緣^一 三義若具足卽得^ニ往生^一」（淨全六・六四三b）とも示すのである。迦才は曇鸞と同じく、阿彌陀佛の本願をもつて増上縁とは云うものの、親因縁はどこまでも衆生の修行であつて、曇鸞が『論註』において明す「信佛因縁」（眞聖全一・二七九）ではなく、「二義具足卽得往生」である。故に迦才の云う他力とは相對的なものと云はざるを得ない。即ち、阿彌陀佛の本願に注意し、しかも曇鸞の十念念佛往生思想を承けながらも、なお全體を通じては念佛の絕對性を強調出來ず、自力的傾向を残しているのである。然しながら、迦才は攝論の出身でありながら、廣く諸經論を引證し、一般佛教を淨土一門へと統一して淨土教の顯正に努め、後世淨土教家に強い影響を及ぼした事は、高く評價されてしかるべきである。

1 『論註』案三舍城所說無量壽經三輩生中雖^ニ行有^ニ優劣^一云々（眞聖全一・三三三九）。 2 拙論「安樂集に於ける曇鸞教學の展開」（龍大佛教文化研究所紀要第二號・二〇〇頁）参照。 3 迦才の教系については、三論宗とするもの——聖聰『淨土三國佛祖傳集』（續淨全六・三二一）・存覺『選擇註解鈔』（眞聖全五・一三八）・知俊『迦才淨土論餘暉鈔』（續淨全七・六五a）——攝論宗とするもの——名畑應順博士『迦才淨土論の研究』四頁・藤原凌雪教授『念佛思想の研究』一八七頁・長西『淨土依憑經論章疏目錄』（佛全・書籍目錄一・三四四）